或るハイカーの記

牧野信一

青空文庫

適量の日本酒を静かに吟味しながら愛用してゐれば、凡そ健康上の効用に此れ以上のものは無いといふことは古来から夙に云はれて居り、わたしなども身をもつてそれを明言出来る者であつたが、誰しも多くの飲酒者は稍ともすれば感情のほとばしるに任せては後悔の種を育てがちになるのも実にも通例の仕儀ながら、わたしも亦その伝で銀座通りなどをおし歩きながらウヰスキーをあをりつゞけたお蔭で、例に依つて例の如く、終ひに閑寂なる療養生活に没頭しなければならなくなつた。兎も角、十何年もの間それに親んで来たものが、一朝にして盃を棄てなければならないといふ段になると容易ならぬ騒動だつた。おそらくそれは失恋者でもあるかのやうな止め度もなく呆然たる日々を持てあまさずには居られなかつた。はぢめの半年は小田原の郊外に移つてゐたが古なぢみの酒友が仲善くて、返つて飲む日が多くなるので、いつそわたしは思ひ切つて、全くはぢめての土地である三浦半島に移つて、横須賀に寓居を定め、金沢、浦賀、三崎、城ヶ島、油壺などゝ、歩いては泊り、泊つては歩いた。恰も、失恋にぼんやりしてゐる友達を慰めてやるかのやうに、酒を飲みたがらうとする自分に向つて、別の自分が親友となり、忘れ給へ、忘れ給へ、否応なく忘れるより他は何うするといふ術のありよう筈はないんだもの……と忠告して、天気でありさへすれば散策へ誘ひ出すのであつた。一里や二里では次第に収まらず、やがて袋を背中につけ、地図をひろげ、薬用酒をポケツトになし——まこと、見るからに頼もし気なるハイカーに相違なかつた。わたしは中学生の時分から、植物や昆虫に通俗的な興味をもつたまゝ現在に至つてゐるので、何処に住んでも大概は何時の間にかあたりの山野を跋渉しつくしてしまふのが慣ひであり、この頃でも網と毒瓶ぐらひの用意は忘れなかつたが、そんなことよりも当時は酒を忘れようとする思ひの方が強かつたので、何は兎もあれひたすらに靴踏み鳴して歩きまはるのであつた。

そのうちの或る一日のコースを誌さう。この道は東京からの、日帰り乃至は一泊の旅には最も平易であり新緑と海の香りを満喫するに充分であらう。

わたしは湘南電車（品川発）を、浦賀終点の一つ手前の馬堀海岸駅で降り、先づ観音崎の一周を試みようと思ひ立つたのである。馬堀から走水のキヤンプ・ビレイヂまで約三哩、横須賀からのバスが通つてゐるが、わたしは海のふちを歩いた。砂蟹が人の跫音をきいて八方へ逃げ出すので踏むではならないと気をつけ出すと、蟹の巣が無数に砂の中にならんでゐて、到底そんな風流心（センテイメンタリズム）を抱いては歩き憎くかつた。街道に昇らうとすると、採取して来たホンダハラやテングサやツノマタを整理してゐる老婆が、灯台へ行くのなら海ぶちを廻つた方が近いのに——と注意して呉れたが、わたしはテングサの間から這ひ出した海綿蟹を一つ貰つて、トンネルを抜けた。重砲学校から響き渡るラツパの音を聞きながら間もなく走水に達すると、日本武尊を御祭神と祀る走水神社に参拝した。「今ヲ去ル千八百余年前日本武尊御東征ノ砌海上浪高ク激シキ風雨ニ遭セラレルヤ、妃弟橘媛（おとたちばなのひめ）命ハ竜神ニ祷リヲ捧ゲ、身ヲ以テ尊ニ代ラントシテ入水シ給ヒシ為御安行ヲ得タリト云フ。社壇ニハ甲冑ヲ帯シ剣ヲ持チ船ニ乗リタル尊ノ木像ヲ安置ス。神社ノ額ハ、海軍少将大勲位依仁親王殿下ノ御染筆ニテ、高村光雲ノ作ナリ、社殿背後ノ丘上ニハ、竹田宮昌子内親王殿下ノ御染筆ニ係ハル妃ノ命（みこと）ノ

さねさしさがむのをぬにもゆるひのほなかにたちてとひしきみはも
ノ御歌ヲ彫ミタル記念碑アリ。」

＊

海は半島の山々の緑を写した如くに晴れ渡つて、横浜を出る数々の船舶や軍港の沖合で演習する駆逐艦や巡洋艦の姿が、あまり眼ぢかにはつきりと眼に写るので、恰も陽炎の中に浮ぶ蜃気楼のやうに不思議なる美しさをもつて眺められるのであつた。折から空には三体――五体の戦闘機が入り乱れてゐた。その銀色の翼が斜めの陽をうけて翻ると、遠い熱帯国の空からでも飛んで来た一群の金翅鳥が美しい東の国の長閑なる風のかほる景色に見惚れて、きりきり舞ひをしてゐるかのやうに思はれるのであつた。出船も入船も、それらの乗員たちは一勢にカルラの舞ひを見あげてゐるのだらうとおもはれるやうな鈍い滑らかな船あしであつた。

空を見あげて歩くうちに、わたしは間もなく観音崎の灯台に着いてゐた。やはり灯台の見物へ赴く二人の女学生と二人の水兵が道伴れになつてゐた。灯台の役人は、何処の役人にも見当らないかのやうな滋味に溢れた親切な方で、螺線の階段を導いて頂上に達すると、事細かにランプの説明をして呉れるのであつた。おそらく、あの灯台を訪れた人で、あの温厚な科学者風の、そして、まことにプラトニツクなる人懐し気なる慈眼を湛へた青年灯台守に厚意を抱かぬ者は無いであらう。――案の条、帰りの崖道で二人の女学生が大いに灯台のロマンテイシズムを論じてゐた。

「僕らも期限が空けたら、灯台守を志願しようかな。」水兵が真面目な顔でそんなことを云つた。

「見学に行きますわ。サインして下さい。」

女学生は手帳をひろげた。

「艦を参観にいらつしやい。」

さつき灯台の見学許可を得る時に、わたしよりも先に署名した水兵の乗組は、呉所属の巡洋艦〇〇であつたことを、わたしは記憶してゐた。

「いつ、出航ですか?」

とわたしは訊ねた。翌々朝の多分五時だと、水兵は云ひながら、綺麗な思ひ出を残して、あの灯台を見上げるだらうなどゝわらつた。わたしは、初夏の朝霧を衝いて岬を出てゆく巡洋艦のデツキから、明方の空へ極夜の光りを放つてゐるであらう灯台を見上げる二人の水兵の姿を想像した。

「あゝ僕たち、きのふ、あそこを通つて来たんだな。」

さつき灯台の欄干から眼下の海を見降ろしながら水兵たちは話してゐた。

「このラムプは九万燭光ですが、千時間用ふと二割方光度が減じます。尤もそれは肉眼では感ぜられぬ程度でありますが、千時間毎に電球は付け換ることになつてゐます。」

役員が説明すると、誰かゞ、その電球は一つ幾何ほどですか?と訊ねた。わたしは、その電球が、やはり、マツダ・ラムプであるのを見て、何やら全く意味もない親しみのやうな感じを秘かに覚えたりした。

「さあ、電球はいくらになるでせうか、会社の方で取り換へて呉れ

るのですが、電灯料は大体一ヶ月、十五円ぐらゐですな……」

「やあ、それは、安いね――」

と誰やらも驚いてわらつたが、わたしも、九万燭光が十五円で点されるなら、普段の如くメートルなんかにケチケチしないで、一番借家のサロンに二十万燭光ぐらひの景気をつけて、借金とりでもおどかしてやりたいものだが――などゝ、途方もない馬鹿なことを考へたりした。

「これが点くと、塔の下で充分に新聞が読めるのであります。但し、月の晩は別として――」

灯台の高さは四尺、水面から測るならば十七丈八尺――光達距離は凡そ十里――。

わたし達は崖を降つて街道に達すると、駄菓子屋の店でラムネを飲んだ。水兵と女学生達は馬堀駅へ向ひ、わたしは未だ午さがりの日が高いので、反対に浦賀へ降り、都合に依つては三崎へ向はうかと考へた。わたしは二三ヶ月前から三崎の一隅に部屋を借りてゐて、金沢や横須賀から折々通つてゐたがいつも一気に貸自動車で衣笠街道から小網代を通つてゐるので、未だ浦賀街道から三崎へ向つたことがなかつた。

「御機嫌好う……」

「さよなら……」

とわたし達は手を振つて別れた。水兵が呉れた駄菓子の袋をポケツトに入れて、ぽつぽつと噛じりながら歩かうとした時、一羽のジヤコウアゲハがわたしの眼の先を飛んでゐるのを発見した。わたしは慌てゝ網を振りながら、追ひかけたが、トンネルの前まで来ると、蝶は糸に引かれるやうに直角に丘の上へ逃げてしまつた。跳びあがつたが、到底とゞかなかつた。あの蝶は他では六月ごろでなければ見ないのに、今ごろ（五月のはぢめ）飛んでゐるのを見ると、やはり半島の陽気は東京に比べて十度位暖いのであらう。

トンネルの中は薄暗いから、稍見得坊のわたしは歩きながら喰ふのは厭だつたが、折角の水兵の厚意を味はつて見ようと、ポケツトに手をやつて見ると、いつの間にか駄菓子は悉く紛失してゐた。大き過ぎる袋で稍始末が悪く、半分以上ポケツトから喰み出してゐたとは云へ、余程わたしは夢中になつて蝶々を追ひかけてゐたに違ひなかつたのだ。でなかつたら、新聞紙の袋で、棒のやうな菓子やら、鉄の輪のやうな菓子が一杯這入つてゐるのが、バラバラとこぼれ落ちるのに気がつかなかつたといふこともなからうに――。見ると、新聞紙の袋ばかりが大きな口をあけてポケツトにのこり、菓子は一つのこらずきれいに飛び出してゐた。おそらくわたしの跳躍はハードル競走のやうに激しかつたに相違ないのだ。蝶々も採れず、損を蒙つたとわたしはあたまを掻いた。そんな騒ぎでわたしはバスの終点である鴨居も忘れて、一挙にして東浦賀の水際に達してゐた。二銭の渡舟に乗つて西側に達して、久里浜行のバスを待つた。馬堀から此処までの間に、ラムネ代と二銭――より他は使はなかつたわけである。馬堀、走水間と鴨居、浦賀間は、観音崎まはりの人々はバスの便を得るのが順当なのであるが、わたしはみんな歩いてしまつても別段の疲れも覚えてゐなかつた。西浦賀の岸壁に、シルエツトのやうな煤色に塗られた一艘の不思議な船を、誰でも見出すであらう。むさしといふ昔の軍艦ださうだが、今では永遠に碇を降したまゝ不良少年の収容所に使はれてゐるのだ。わたしは、それをぼんやりと眺めながらバスを待つてゐた。少年達は浅黄のユニホーム姿も甲

斐々々しく、今しもランチ（快天丸）へ乗り移つて沖合の漁業へ出勤するところだ。

三崎行のバスに乗り、一先づわたしは久里浜で下車するつもりだつた。ところがわたしと並んで乗込んだ土地の人らしい乗客達は、女車掌が切符を切りに来ると、至極さり気ない済した風で、その行先をたゞ一言、

「ペルリ。」と告げるのみであつた。

「ペルリ。」――「ペルリ。」

誰も久里浜とは云はなかつた。わたしも左う云ふべきだと思つたのであるが、何故か、妙に気恥しくなつて、云ひ損ひ「三崎――」と告げた。

飲酒常習者の白面（しらふ）は兎角はにかみ易いものであるが、こんな風に閑さへあればあちこちと歩きまはつてゐるうちに、次第にわたしは健康を取り戻し、漸く夕べの食膳なる一盞の液体に千金の価値を見出すに至つた。歩いた後の一盞は正しく百薬に勝るものを沁々と覚えさせられ、近くは半島を出でゝ遥かなる旅路の彼方に恍忽の夢を結ばうと画策してゐる次第である。兎もあれ百薬に勝る一盞は、ハイキングの賜物であつた。わたしは、歩くことを、声高らかに賛成せずには居られない。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第六巻」筑摩書房
2003（平成15）年5月10日初版第1刷
底本の親本：「旅　第十三巻第五号（五月号）」日本旅行倶楽部
1936（昭和11）年5月1日発行
初出：「旅　第十三巻第五号（五月号）」日本旅行倶楽部
1936（昭和11）年5月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：宮元淳一
校正：門田裕志
2011年9月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或るハイカーの記

牧野信一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/